

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 14 日現在

機関番号：34303

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K03262

研究課題名(和文)古代の世界観を記憶する景観の歴史地理学的研究

研究課題名(英文)Historical geography of mythical worldview in landscapes

研究代表者

佐々木 高弘 (Sasaki, Takahiro)

京都先端科学大学・人文学部・教授

研究者番号：20205850

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、古代の神話的世界観が、どのようにして景観に記憶されてきたのかを明らかにすることである。その方法として、神話のなかに描かれた場所に注目する。対象とした神話は、古代については『古事記』『日本書紀』『風土記』『延喜式』などである。これら神話の多くが、古代の交通路や、国境、都市などの場所をともなっている。

つぎにこれら場所が、中世の物語、御伽草子においてどのように描かれているのかを調べた。近世においては、城下町の物語を研究対象とした。結果、中世、近世においても、古代の神話的世界観を継承していることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、景観が私たちの過去を記憶している、つまり単なる物質を超えて、私たちの語りかける生命としての景観という、人間中心主義からの脱出という、新しい視点を提示した点にある。これはアクター・ネットワーク理論の、アクターを人間だけでなく、様々な物質をも含もうとする視点とも似ている。

社会的意義は、このような新しい景観論が、今後の環境思想に影響を与え、そのことが今後の人と環境の関係性を変える可能性がある。このことは地域計画や地域間のネットワークのあり方にも影響を与えるだろう。

研究成果の概要(英文)： In this research, I will try to investigate how landscape mirrors the culture of Japanese ancient worldview. In order to search this theme, I focused on some places where were described in Japanese myths, Kojiki, Nihon-shoki, Fudoki, Engishiki. These myths were narrated with some sort of places like ancient traffic routes, national capital, provincial capitals, stations, temples, shrines and boundaries.

And I paid attention to some places where were described in medieval tales like Otogi-zoushi. About modern times, I treated folktales which were narrated in castle town to know same concern. As a result, it is clear that ancient worldview have succeeded to medieval and modern landscapes.

研究分野：人文地理学

キーワード：神話的世界観 景観 言説

## 1 研究開始当初の背景

本研究の開始当初の背景は、近年の人文地理学の景観研究において、人間中心主義からの脱却が叫ばれている点にある。それはテキストとしての景観研究から物質としての景観研究へと回帰しようとする動きでもある。これら新しい景観研究においては、社会や空間、場所、自然の関係を固定化したものとしてとらえるのではなく、流動的であると認識することによって、動的にとらえようとするポスト構造主義の理論を採用する動きもある。そして人間の表象や生産物の媒介として提示される時のみ、活力、運動、あるいは力を得る、受け身的なものとしての景観をとらえようとする、社会・文化地理学的一般概念の打倒を目指す研究、つまり伝統的な人間中心的な景観研究からの脱出が企てられている。ここでは景観を人類の記憶装置の一つとして受けとめ、その人類の記憶である景観が物語を通して、私たちに語りかけている、つまり生きている景観としてとらえようとする新しい視点が生まれつつある。この点については研究期間中に出版した『生命としての景観』（せりか書房）に詳しい。

## 2 研究の目的

本科研の研究目的は、場所に記憶された、様々な時代の人々の行為が、どのように現在に至るまでの景観に表出しているのかを、古代・中世・近世・近代・現代の様々な言説資料を使用して、人間と場所の無意識的で深遠な関係を明らかにすることである。特に古代律令国家の世界観にもとづく、都を中心とした日本列島全体を含む神話的世界観に注目する。この世界観は古代の交通路に基礎をおいているため、中世や近世あるいは現代までも継承されている。その交通路上に作られた都市は、古代には国府や郡衙があり、近世になると城下町も含まれる。あるいは複数の交通路が交差する場所や国境にも神社や寺院などの宗教施設も作られている。このような物質的景観と語られた言説的景観の関係に注目することによって、人間と場所や景観との新たな関係を明らかにする。

## 3 研究の方法

研究の方法は『古事記』『日本書紀』『風土記』などの、最も古いと考えられる物語と景観の関係を明らかにすることからはじめる。そしてこれら物語の語り手、あるいは権力者の視点から、物語を展開させるにあたって、周囲のどのような景観を取り込みながら構造化させているのかを、フィールドワークと地図化の作業から明らかにしていく。

つぎに中世、近世、近代へとどのように言説と景観の関係が変容していくのかを探るため、『今昔物語集』『宇治拾遺物語』などの仏教系の物語と景観の関係や、中世の『御伽草子』やそれに類する絵巻物に描かれた物語と景観の関係を、近世の地誌類や諸記録に掲載されている物語を資料とする。

これらの作業を経て、上記の物語群が各地の伝承群へと拡散していったとする仮定にもとづいて、類似の伝承群を選定して、平安京を中心に、西は山陽道と山陰道にそった都市や国境を、東は東海道、東山道（中仙道）、北陸道にそった都市や国境を、南は南海道や

西海道にそった都市や国境を対象に、物語と景観の構造がどのように変容していったのかを明らかにする。

そのような物語と景観の構造の変容過程が明らかになれば、逆に現在の伝承から時代を遡ることが可能となる。そのような物語の時代を遡る作業は、物語の所有者であった、日本の政治権力や移民、流通等の足跡をたどることになる。それらの時代を遡るモデル構築が可能となれば、各地の考古学的発掘成果や古地図、古文献とともに日本の古代地理空間が再現できる。

#### 4 研究成果

醍醐天皇の命によって藤原時平らが編纂し延長5(927)年に成立し、康保4(967)年に施行された平安時代の法典『延喜式』には、興味深いきざまな古代地理空間に関する言説が見いだせる。ここで語られた地理空間は抽象的であるが、平安時代前期に勅撰された歴史書によると、これら祭礼が特定の場所で行われていたことがわかる。また『延喜式』の「陰陽寮」の讎(おにやらい)の祭文に、穢れた疫鬼が住む場所として「東方陸奥。西方遠値嘉(五島列島)。南方土佐。北方佐渡の奥」が示されている。

もう一つの重要な言説は道饗祭の祝詞である。淳和天皇の命によって、天長10年(833)に小野篁らが編纂した律令の解釈集、『令義解』によると、この祭は都の四隅の道の上で行われ、荒ぶる神たちが都に侵入しないように、お迎えし「饗遏」する、つまり御馳走をして思い止まってもらう祭礼、とある。

これら言説から浮かび上がってくる古代地理空間は、御所を中心とした天界・地上界・地下世界という抽象的な概念から、具体的にはその祝詞を読み、祭を行う場所と流れもどす根の国・底の国の具体的な場所概念である。そしてその具体的な場所を示された根の国底の国から、道を伝って乱暴にやってくる物(鬼)たちの出発点を、各地の道が交差する衢で接待し、根の国底の国へと送り返す、循環的な世界観である。

この『延喜式』の祝詞や記紀神話、「風土記」に登場する、荒ぶる神に焦点を当て、その神話的世界観を引き継いだ、中世の御伽草子の虚構と現実を、歴史地理学の観点から考察した。

荒ぶる神は、『古事記』では国譲り神話、神武東征、ヤマトタケル説話に、天皇に服属しない神として登場する。『日本書紀』においても、ヤマトタケル説話に登場するが、国譲り神話などでは、邪神や邪鬼と記されている。「風土記」においては、人々の交通を妨害する神として描かれることが多い。

『延喜式』の祝詞で荒ぶる神が登場するのは、「大祓」、「遷却崇神」、「出雲国造神賀詞」である。いずれにおいても、天界である高天原にいる天神たちによって、追放され平定される、地上界(豊葦原水穂国)の神として描かれている。これら荒ぶる神の性格は、『古事記』の国譲り神話とほぼ同じである。ただしここで興味深いのは、「大祓」は都に溜まった罪を、地下世界である根の国底の国に祓うことを目的とした祭礼であるが、その前段でこの神が語られる点にある。さらに「遷却崇神」は、宮中にある崇神を、展望のきく山や、清らかな河に遷却する祭礼であるが、やはりここでもその前段で語られる。「出

雲国造神賀詞」は、出雲国造が宮中で天皇を讃える祝詞だが、ここでもその前段で、この神が語られる。つまりこれら祭礼は、荒ぶる神を天神（天皇の祖神）が平定したことを確認した上で、人々の罪を祓い、祟り神を別の場所へ遷し、そして出雲国造が天皇家を讃えているのである。つまりこの荒ぶる神は、人々の罪、祟り、抵抗者の服属と深く関連しているといえる。

この荒ぶる神とならんで、天神に平定されるのが、地上界で「さわがしくものを言っていた岩石や樹木や草の葉」である。あたかも地上界の自然そのものが、荒ぶる神の一員であるかのような表現であるが、これは祝詞だけでなく、記紀神話でも語られている。さらにヤマトタケル説話において、「山河の荒ぶる神」とあるのは、両者を合わせた表現とも見ることができよう。

このように荒ぶる神や、ものを言う岩石・草木は、神話上の天皇が天界から地上界へと降臨してくる以前の、つまり天皇が支配する以前の地上界の状態を指しているのである。さらにその後の、神武東征での抵抗者、さらにヤマトタケル説話では、それ以降の朝廷に抵抗する、人と自然をも意味していることになる。

その典型的な事例としてあげられるのが、『常陸国風土記』の行方郡「夜刀の神」の伝承であろう。もう一つのタイプの荒ぶる神は、『古事記』のヤマトタケル説話にみる、道の荒ぶる神である。この神は人々の交通を妨害する。『播磨国風土記』、あるいは『肥前国風土記』佐嘉郡にある。

これら道の荒ぶる神は、伝承を地図化することによって、実際に古代の交通路上に位置していることがわかる。また先の「夜刀の神」も地図化すると、やはり交通路上に存在していることがわかる。なぜ道なのかというと、それは古代律令国家が交通路の整備を行って、全国を支配しようとしたからである。また地方行政区画を設定することを、山河を定める、という行為として表現されているのも、おそらくは山河の荒ぶる神と関係があるのだろう。なぜなら国境設定は先住民にとっては、抵抗せざるを得ない事案であったと考えられるからである。

この道の荒ぶる神の神話的世界観が、中世の鬼神伝承に引き継がれていく。例えば室町時代に成立した御伽草子『田村の草子』は、大嶽丸という鬼神が鈴鹿峠で人々の交通を妨害し、天皇への貢ぎ物も絶えてしまった、と記している。この鬼神も、先の神話の荒ぶる神と同様に、交通路上に出現し、国境にも接している。また古代の三関である鈴鹿関が近くにあることも見て取れる。鈴鹿峠にある片山神社の祭神は、「大祓」の祝詞で罪を祓う神々（セオリツヒメ・イブキドヌシ・ハヤサスラヒメ）、根の国底の国の主宰者であるスサノヲらである。さらに近江国側には田村神社があり、坂上田村麻呂が鈴鹿山の鬼神を討伐した伝承とともに、厄除矢とその祭礼が現在も残されている。また鈴鹿峠頂上の南崖には、「鏡岩」があり、鈴鹿峠の鬼女立烏帽子が鏡として使ったものだという、伝承もある。

同じく室町時代の御伽草子『酒吞童子』でも、同様の場所がこの鬼神の棲み家として描かれている。この鬼神の場合、いくつかの棲み家が伝えられている。一つは丹後国と丹波国の国境に位置する大江山の千丈岳である。ここにも古代の丹後路が通過している。さらにこの大江山には、古代の抵抗者、土蜘蛛がいたとする伝承も残されている。もう一つは山城国と丹波国の国境に位置する大枝山である。ここには古代の山陰道が通過しており、酒吞童子の首塚もある。『伊吹山酒吞童子』では、伊吹山に棲み家が設定されている。伊

伊吹山は近江国と美濃国の国境に位置し、その南麓を東山道が通過し、不破関がある。伊吹町には「伊吹弥三郎」という伝承が残されている。また伊吹山の神はイブキドヌシだとされ、そしてあのヤマトタケルは、この伊吹山の荒ぶる神を平定しようとして命を落としている。さらにこの物語のなかで、酒吞童子は自らの出生地を新潟県の国上山周辺と述べ、国上寺で育ったという。国上山は古代北陸道がここから佐渡へと渡ることから、越後国と佐渡国の国境に相当する。さらにこの地にも弥三郎にまつわる伝承が残されている。

これまでの鬼神が都から遠く離れたところの交通路や国境で権力に抵抗していたのに対して室町時代の『玉藻前草子』の鬼神は、宮中にまで侵入してくる。それは近衛天皇の時代、久寿1年(1154)の春のこと、鳥羽上皇の御所に玉藻前と呼ばれる美女として現れた。これは室町時代の物語にすぎないが、歴史を振り返ってみると、つぎのような事実が浮上する。現実世界では、久寿2年(1155)近衛天皇が崩御、そしてその翌年に鳥羽上皇も亡くなっている。そして上皇の死をきっかけに、さらに翌年の保元1年(1156年)、崇徳上皇と後白河天皇の間で、保元の乱が起こっている。

この保元の乱に敗れた崇徳上皇は、讃岐に流される。祝詞にある通り、天皇家から出た罪が、大袂のごとく平安京から淀川を伝って、難波の海から、四国は讃岐へと抜かれたのである。『保元物語』によると、崇徳上皇は讃岐で亡くなる前、まるで天狗のような姿となって「日本国の大悪魔となり、皇を取って民となし、民を皇となさん」と誓ったとされる。そしてこの乱をきっかけに、時代は平家、そして源氏、つまり武士の世へとかわっていく。玉藻前の物語は、このような時代の変わり目を、するどく見つめていたのだ。

なぜこの玉藻前の棲み家という虚構が、那須野という現実と手を結んだのか。まずは古代の交通路が通過している点。さらにその場所は、陸奥国と下野国の国境にあたり、特に白河関が置かれるような、重要な場所であった。白河関が設置された理由は、蝦夷に対する防衛にあった。つまりここまでの議論にある通り、ここでも先住民と荒ぶる神の関連が、想定出来る。

これら鬼神たちが退治された後、その首や身体が都へと運ばれ天皇に観覧される。そして宇治の平等院の宝蔵へと納められた。この平等院は山城と大和・近江を結ぶ交通の要所で、奈良に都があった頃は、この宇治を通過する道が近江を基点に、北陸や東国を結ぶルートであった。このような交通の要所となる場所は、実際に戦場になることが多い。天皇が崩御された場合も、あの古代の三関と宇治、淀、山崎の警護が固められている。もう一点、この宇治川と宇治橋が、鬼神を奉納する虚構と結びつくのは、平安時代から中世にかけて畿内の七瀬祓が、この宇治橋周辺で行われていたからであろう。

このようにこれら神話的景観には、様々な伝承や記録、文学作品などの言葉から、関所、神社、交通路などの物、そして人々の祭礼行為など、様々な要素が重層している。それらが都を中心とする権力と、地方に偏在する抵抗勢力、先住民などの常に変容するネットワークの上で絡み合い、虚構と現実の世界を形成したのである。

以上の研究成果は、『妖怪巡礼』(古今書院、2020)、『古代的世界観を記憶する景観の歴史地理学的研究』、令和3年(2021)3月18日、平成29年度～令和2年度科学研究費補助金 基盤研究(C)研究成果報告書、京都先端科学大学、A4版209頁として発表した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 佐々木高弘	4. 巻 41
2. 論文標題 生命としての景観	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 人間文化研究	6. 最初と最後の頁 1 ~ 33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐々木高弘	4. 巻 51
2. 論文標題 風景の怪 アニメの風景と妖怪	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 怪	6. 最初と最後の頁 42 ~ 44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐々木高弘	4. 巻 50-2
2. 論文標題 荒ぶる神・ゴジラと道饗祭	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 子どもの文化	6. 最初と最後の頁 8 ~ 13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐々木高弘	4. 巻 52
2. 論文標題 妖怪文化はすべてに通ず	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 怪	6. 最初と最後の頁 70 ~ 73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐々木高弘	4. 巻 52-9
2. 論文標題 妖怪は疫病か？	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 子どもの文化	6. 最初と最後の頁 218～221
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐々木高弘	4. 巻 20
2. 論文標題 妖怪文化を地理学的に考える	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 比較日本文化研究	6. 最初と最後の頁 102～113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件／うち国際学会 1件）

1. 発表者名 佐々木高弘
2. 発表標題 言説と古代地理空間
3. 学会等名 人文地理学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐々木高弘
2. 発表標題 日本における怪異・妖界の循環ネットワーク
3. 学会等名 中日妖怪シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐々木高弘
2. 発表標題 妖怪文化を地理学的に考える
3. 学会等名 比較日本文化研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐々木高弘
2. 発表標題 神話にみる虚構と現実の歴史地理
3. 学会等名 人文地理学会（招待講演）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 佐々木高弘	4. 発行年 2019年
2. 出版社 せりか書房	5. 総ページ数 293
3. 書名 生命としての景観	

1. 著者名 佐々木高弘・香川雅信・飯倉義之他	4. 発行年 2017年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 365
3. 書名 『47都道府県別・妖怪伝承百科』	



1. 著者名 佐々木高弘・小松和彦・常光徹他	4. 発行年 2017年
2. 出版社 せりか書房	5. 総ページ数 499
3. 書名 進化する妖怪文化研究	

1. 著者名 佐々木高弘	4. 発行年 2020年
2. 出版社 古今書院	5. 総ページ数 192
3. 書名 妖怪巡礼	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------